

卒業にあたって

日々新たな挑戦

生涯教育専攻 4回生 池洲 輝彦

入学までの経緯

私は社会人として応募の結果、天理大学に入学した。それまで働くことは、家庭における立場や職場における職責などから当然のこととして受け止めてきたし、自分ながらに努力もしてきたつもりであった。コンピュータ技術者として職場で、その使命を終えようとしているとき、自分自身の中で以前からの思いが次第に強くなっていった。もう一度勉強してみたいという思いである。どうせなら、過去に経験してきたものでなく、全く別な分野を学びたかった。そのためにはいろいろな選択肢があったが、同じ学ぶにしても中途半端なことではなく、全日制の学校を志すことにした。ちょうどこの時分に、テレビの報道番組で「96歳の大学生」、歌川豊国のことが放映された。「生涯青春、生涯学習、生涯健康」をスローガンに学生生活を送っている姿に感銘を受けるとともに、学問をするのに年齢にこだわる必要などないのだという考えが、自分の思いと同じ方向であったので大いに勇気づけられた。種々考えた結果、私の家から近いこともあり、天理大学に応募しようと決心した。その前段としてオープンキャンパスを体験しておこうと、生涯教育の研究室に立ち寄ったことがきっかけで、生涯教育を志望することにしたのである。

新たな目標

私の人生にとって、長らくご無沙汰していた学生に再び戻ることになった。気持ち新たに、日々の授業に取り組むことは当然のこととして、具体的な目標を定めることにした。第一は、受講可能な機会を最大限生かしたい、そのため許容限度いっぱい余裕を持って履修しようと考えた。第二は、資格の取得である。生涯教育専攻において、資格を得るための科目を可能な限り修得することを予定した。第三は、各種の催しにできるだけ参加することである。これらの目標は、可能か否かは別にして自分への戒めであり、学習に対する計画と達成感、充実した学生生活といったような観点から、設定することに意義があるように思えた。

授業に関すること

授業では、いつも教壇から見て2列目、斜め右の席で受講した。特に理由はなかったが、最前列は教壇に近づき過ぎて目障りになりはしないか、またこちらからは上向き加減の姿勢を保つことになるが、しかし、後ろの席では授業に集中しづらいとか、様々な事を思いながら、自

然に2列目の席に定着し受講していた。この位置は授業中、深い睡眠に陥ることもなく適度な緊張感を保ちながら受講することができた。

授業中は、先生方と科目に関連した質疑等のやりとりは当然のことであったが、それ以外、特に授業終了後、次の授業開始までの15分間は実に貴重な時間であった。わずかな時間であったが、先生と授業に関連する事から、そこから波及する話題等について話し合った。また、先生の方からは、私自身に興味を持たれることが多く、これまでに至る経緯や体験等、実に様々な会話をを行ったものである。このような状況は、たまに廊下や、食堂等で先生と出会った際も同様であった。

スポーツ実技関連の授業では時々、身体にトラブルを起こした。柔道での前転運動による目まい、体力テストで走った際に起きた足の肉離れ、その他擦り傷や打ち身等で、たびたび医務室のご厄介になった。しまいには、医務室へ行くと、「今日はどうされましたか」と先に聞かれる始末であった。しかし、授業の出席に差し障る様な大きい怪我はなく、無事に終了できたことは幸いであった。

各科目で提出を求められたレポートは、この4年間によく提出したものだと思う。数えてみると、授業の最後や毎週提出するミニレポート、課題図書等の分は除いても44件に及んでいる。しかしその内容について今、改めて読み返してみると、この時はなぜこんなおかしなものを提出したのだろうか、と悔やまれるものが多い。

天理教科目について

天理教に関する科目は天理教学1～3を履修した。せっかく天理大学で学んでいるのだから、その特徴とも言える天理教学は、必修科目や信者であるなしとかにかかわらず、より多く、習得しておくべきであると思う。恵まれた宗教環境のもとで、教理や体系はもとより、人間としてのあり方や生き方を学ぶことは、卒業後どの分野で活躍するにも影響を及ぼすであろうし、また、大いに期待されるのではないかと思われる。

特に、記憶に残るものとしては天理教学3での提出物がある。『おふでさき』第三号、百四十九首を毛筆で書き写すものであり、半紙の枚数でわずか20枚であったが、大体この5倍位の量は練習したであろうか、夏休み中の宿題であったため時間は充分にかけることができた。最初は、みみずが這っているような書体であったが、おかげで仕上がったものは、何とか格好がつき、読めるようになったのではないかと考えている。

4回生になって

4回生になると生涯教育を専攻している同学年の生徒とは、めったに会わなくなった。特に

授業においては、ほとんど無いといってもいいくらいである。3年間で卒業要件を満たしておれば、就職活動や卒業論文にも専念する必要があるだろう。しかし、私にとって学習できる機会を逃がすことは、残念でもあり、もったいないという気持ちもある。学生になった最大の目的は、学ぶことであり、卒業は学び続けた結果だと思うからである。私は初期の目標通り、年間60単位までという許容限度いっぱい履修した結果、4年間で240単位を修得することができたし、資格は、社会教育主事、図書館司書、博物館学芸員を得ることができた。また、催しも4回生として生涯教育専攻の合宿に加わったように、できる限り参加することに努めた。

私は、専攻に関係なく同じ教室で、たまにしか出会わない生徒ともよく話をした。自分の体験談を述べたりした後、「学校での授業や学習は、厄介で苦しい時もあるかもしれないが、実社会に出て様々な人間関係や困難な仕事に遭遇しながらも、働きぬいていく努力に比較すれば何ほどのこともないよ」と口癖のように言い続けた。しかし、どの程度聞き届けられたらだろうか。実社会で具体的に体験した時、はじめて実感として捉えられるのではないかと思う。私自身がそうであったから。

卒業を目前にして今日に至るまでの4年間、紆余曲折があったものの、健康を維持し1日も休むことなく学習できたことは幸いであったと思うと共に、家族、先生、同窓生、その他周囲の方々に感謝したいと思う。

新たな挑戦

私にとって、天理大学で日々学ぶこと自体が、生涯学習の実践にもつながっているとの考えに基づき、私自身の目標を持ち、計画し、実践し続けることに努めてきた。このような姿勢は、卒業後、どのような環境に置かれても、絶やすことなく、持続しつづけていきたいと思う。

生涯教育専攻の学生にとっては、記憶にとどめておくべき人物であるP・ラングラン。彼の言葉を借りれば、「生きるということは、人間にとって、万人にとって、つねに挑戦を意味する」と述べている。この「挑戦」の部分を「学ぶこと」と理解し、生涯を通じて学習を実践していくことの意義を汲み取ることが大切であると考えている。

天理大学を卒業することは、次の新たな挑戦の始まりであると私は思う。